

パナソニック・イズム

ism

モノづくりスピリッツ
発見マガジン

アーカイブ
Archives

SHARE

▶ コンテンツ一覧 ▶ このサイトについて

ism トップ > ガンダーラ井上の帰ってきたトリガーハッピー ～デジタルカメラ ルミックス L1～

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

ガンダーラ井上の 帰ってきた トリガー ハッピー ～デジタルカメラ ルミックス L1～

2006年夏、いよいよ松下の
デジタルカメラLUMIXに、シリーズ初の
一眼レフL1が登場。最新のデジタル
光学技術が満載されたそのカメラは、
なぜか、どこか懐かしい
佇まいを醸し出していた…



- 📖 プロローグ ▶
- shot 01 フラットトップの一眼レフ今昔物語。 ▶
- shot 02 ライカ ミーツライカ。 ▶
- shot 03 ありがたきもの、手ブレ補正。 ▶
- shot 04 ライブビューって、何だ? ▶
- shot 05 フォーサーズ、レンズ交換の誘惑。 ▶
- shot 06 操るヨロコビ、「走る人」のないカメラ。 ▶
- shot 07 デジタル一眼レフの天敵、それはゴミ問題。 ▶
- shot 08 一眼デジカメでピンホール。 ▶
- エピソード📷 ライカレンズでグッドナイト。 ▶

[スタッフ一覧へ](#) / [プロローグへ](#)

このコンテンツ、あなたの評価は? おもしろい ふつう おもしろくない

ismトップ

[コンテンツ一覧](#) | [このサイトについて](#)

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
~デジタルカメラ ルミックス L1~ガンダーラ井上 ▶
(別ウィンドウが開きます)**プロローグ**
LUMIX L1, そのカタチが気になる。**「イズム」読者の皆さん、おひさしぶりです。**

このウェブマガジンNo.9「ガンダーラ井上のトリガーハッピー」が公開されたのは2003年の2月（編集部追記：右のコンテンツは2008年9月30日をもって掲載終了させていただきました）。あれから数年が経過したワケですが、その間に世の中の流れはデジカメに完全シフトしてしまいましたね。不肖ガンダーラも最近の仕事ではフィルムを使う場面は希ですが、ボクはいまだにデジカメとフィルムカメラの双方を所有しています。

その理由はふたつ。まず、時間的効率は悪いですけどフィルムで撮る写真にはデジタルとは違う質感が得られる場合があるということ。

そして、マニュアルフォーカスの金属製カメラには、持っている嬉しくなる存在感があること。

第1の理由に関しては、フィルムっぽい結果が得られる現像パラメーターの開発などによって将来的にはシミュレート可能になってきそうな気配を感じます。昔のアナログシンセの音が、今ではノートPCで出せる時代ですし…。かたや第2の理由は、スペックの問題ではなく非常に感覚的なテーマなので語るのがムズカシイ。

でも、ちょっと気になるデジカメが2006年のPMAショーで話題になりました。それが、新しいルミックス、L1なのであります。

ちなみにPMA（Photo Marketing Association）ショーとは世界最大規模のカメラ・映像機材の国際展示会。ポジティブ・メンタル・アティテュードの略ではありません。ドイツで行われるフォトキナと共に注目度の高い展示会です。

このカメラ、最新型なのに何だか懐かしい雰囲気です。

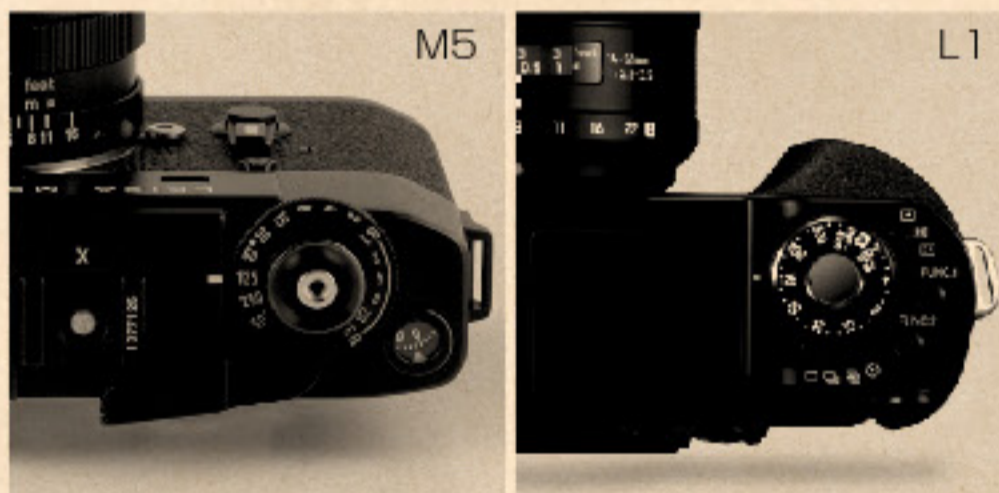
装着されているレンズはライカDバリオ・エルマリート。直線を基調とした端正なスタイリングは、ボク的にはライカM5型を連想してしまうんですね。

ライカM5型



1971年に発売された露出計を初めて内蔵したライカ。ボディは大振りだが、とても使いやすい。

ね、ちょっと雰囲気に近いですよ。四角いボディに円筒形のレンズ。誰もがイメージするカメラの基本的なシルエットですけど、最近こんなカタチのカメラは珍しい存在になってきている。だから逆に新鮮な印象でもあります。さらに無理矢理っぽいんですけどライカM5型との共通点を探してみれば、シャッター速度の設定ダイヤルがシャッターボタンと同軸にレイアウトされていたりもするんです。



シャッターボタンと同軸に配置された速度設定ダイヤル。L1もM5同様に速度設定ダイヤルが同軸に配置されている。



中 野 肇
(もく なか かおる)
パナソニックDSCビジネスユニット
商品企画チームでLUMIX L1の開発に関
わる。オフタイムにはデジカメだけな
くクラシックカメラも使うらしい。

そういえば、最近のカメラには専用のシャッターダイヤルが無かったりしますよね。ボタンでモード選択して汎用ジョグダイヤルを使うよりも、L1の採用した方式は直感的に操作ができそうな雰囲気です。

最新のデジカメに、あえてカメラの基本形とも言うべきフォルムと操作系を採用すること。ボク的には賛成に一票！ という感じですけど、この決断には勇気が必要だったのでは？ そんな疑問に企画担当の中野氏が答えてくれました。

そもそもL1のデザインを決定するにあたっては、その道筋を示していたモデルが存在していたそうです。すなわち、それがLC1。高品位なボディに、フォーカスやズームそして絞りまでリングで操作できるアナログの直感的な感覚を重視したカメラ。LC1のコンセプトは評価が高かったそうですが、同時に「これでレンズ交換ができれば良いのに！」というリクエストが数多く寄せられたそうです。ふむふむ。たしかにライカっぽいスタイリングなんだから、レンズもライカみたいに交換できれば嬉しいですよね。自分の撮影スタイルに応じて各種の交換レンズを使い分けられるシステムカメラであること。この可能性が大事です。「ただし、一眼レフがこのスタイルでいいのか？ という議論は当然あったけど」と、中野氏は静かに語ります。

そうなんです、L1って一眼レフなんです。

ちょっと意外ですよ。だって一眼レフといえば、カメラの上部に「出っ張り」があるのが普通ですから。一眼レフって、だいたいこんなカタチですよ。どおしてL1は一眼レフなのに「出っ張り」が無いのか？ 次回は、そのあたりを検証してみる予定です。



一眼レフの一般的なイメージ図



ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラ ルミックス L1〜ガンダーラ井上
(別フィンドウが楽しめます)shot 01
フラットトップの一眼レフ今昔物語。

一眼レフなのに「屋根の出っ張り」がないルミックスL1。随分とスッキリしたデザインですが、そもそも一般的な一眼レフのトッププレートにある出っ張りの正体って何なのでしょう？

カメラの中身を見れば、そこには出っ張りの理由が入っているに違いありません。そこでイズム読者の皆様のご好奇心を代表し、もし壊してしまっても自己責任だと承知しつつ手持ちの古い一眼レフを分解してみると、こんなモノが入っておりました。

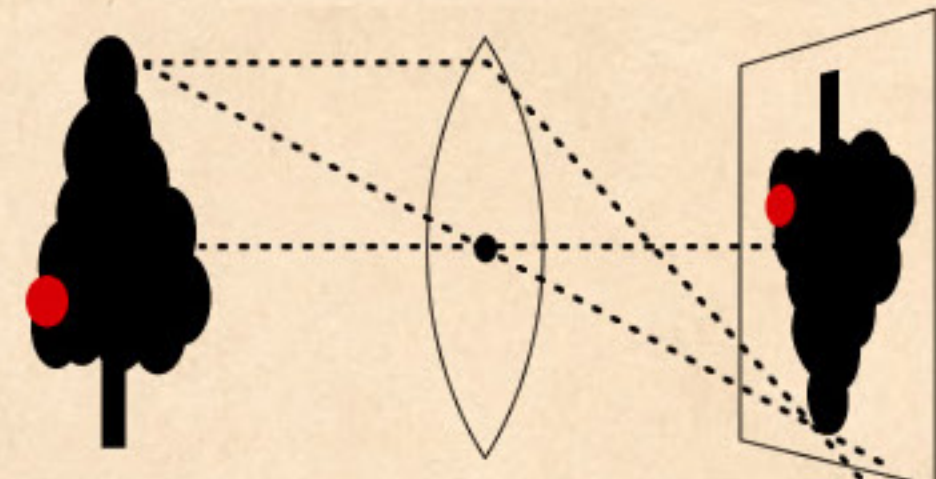


一眼レフの「屋根の出っ張り」にあるものは…

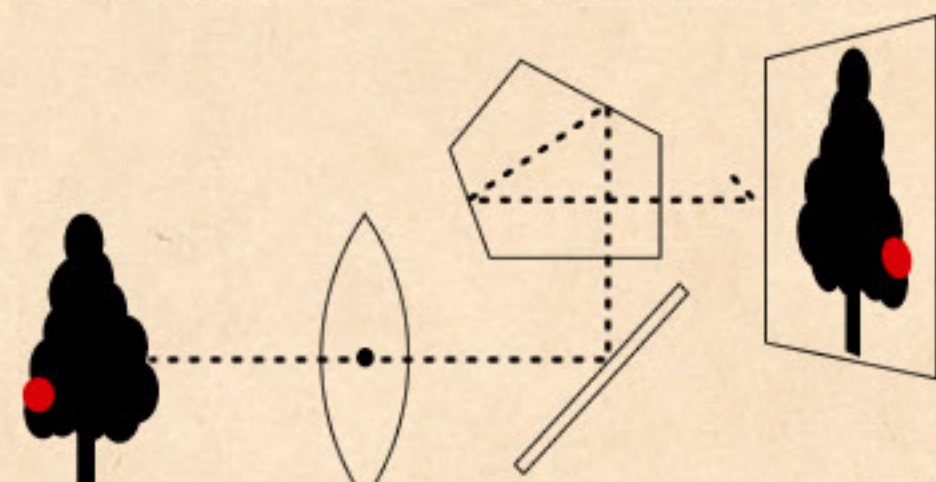
ペンタゴナル・ダハ・プリズム
五角形で稜線のあるプリズム。
一眼レフの出っ張りの正体はコレだったのです。

はい、これがペンタプリズムという部品です。何でこんな不思議なカタチのプリズムが入っているのでしょうか？

その説明は結構ややこしいのですが、ちょっとご辛抱ください。一眼レフとは、撮影に使うためのレンズと、ファインダーで観察するためのレンズを共用しておりまして、レンズから入ってきた画像をミラーで反射させて観察しているのです。お手持ちの虫眼鏡と鏡で実験していただくと面白いと思うのですが、レンズを通して見える世界は左右も上下も逆像。



で、そこに1枚のミラーを置くと上下は正像になります。ただし、この状態だと左右は逆像のままです。観察する対象に向かって“お辞儀”している格好になります。この問題を解消して目の高さでファインダーを覗き、しかも左右も逆像にならないようにする役目をペンタプリズムが担っているという次第です。



一眼レフのシンボルとも言うべきペンタプリズムですが、何か違う方法を用いて同じ目的を果たしているカメラが世の中には存在していたはず。ペンタプリズムを使わない一眼レフ、ルミックスL1の源流を辿ってみたい。そこで不肖ガンダーラの師匠、浅草の早田さんのもとへと向かいます。

早田清
東京・浅草「早田カメラ」の店主。世界トップクラスのカメラ修理家でもある。お店には整備済みのクラシックカメラがずらりと並び。早田カメラ店
東京都台東区浅草2-1-3
Tel.03(3841)5824
11:30~20:00 木曜定休

ガ 「Panasonicの一眼デジカメが出ましてね、ペンタプリズムじゃないファインダーなんです。そこで、その方面の先輩カメラを見せて頂きたいのです」

早 「おう、あのライカレンズのヤツだな。たしかフォーサーズか何かの・・・」

ガ 「早田さん、古いカメラだけじゃなくて新しいのも知ってるんですね(笑)」

早 「それくらい知ってるよ！ ペンタプリズムじゃない一眼レフなんだから。お母さん、ガンちゃんにフォカフレックスを出してあげて！」

フォカフレックス



1959年に登場したフランス・OPL製のレンズシャッター一眼レフ。独自の光学設計により、お洒落なスタイリングを表現。

ガ 「さすがフランス製、とってお洒落でやすすね」

早 「すごいだろ。普通の一眼レフと違ってミラーでカメラの下に画像を反射させて、底にあるミラーでもう一回反射させて、その上にあるファインダーで90°光路を変える仕組みなんだ」

ガ 「何でまた、こんなユニークな構造なんでしょ？」

早 「まあ、フランス人のセンスとしては“出っ張り”が許せなかったのかな」

ガ 「なるへそ。カメラだって粋なスタイル重視ってコトなんです」

早 「フォカフレックスより前に、ハンガリーにペンタプリズムのない一眼レフがあった。ほら、そのウインドウにあるから」

ガ 「こ、これは生産台数わずか数百台の、神聖級カメラじゃないですか！」

早 「しかも、コイツは完璧に動く。パッチリ修理してあるからね(笑)」



デュフレックス

ハンガリー・ガンマ社が1947年に生み出した、フォーカルプレーンシャッターの一眼レフ。驚異的なスペックとユニークな外観をもつ歴史的価値のある1台。

ガ 「素晴らしいカメラですね。手触りの良さや、独特のスタイリング。ハンガリーって馴染みのない国ですけど、このカメラ1台で、尊敬すべき国になりました。コレを1947年に作りあげたのは驚きますよね」

早 「とにかくスゴいだよ。ミラーはクイックリターンだし、レンズも自動絞。戦後の一眼レフの主要な機能は全て入ってる。しかも一眼レフのファインダーだけじゃなくて、フレーム入りの透視ファインダーまで付いてる(笑)」

ガ 「黎明期のデジカメが、液晶ファインダーと透視ファインダーの2本立てだったのに似て、何か過渡期な雰囲気ですね」

早 「他にペンタプリズムを使っていない一眼レフと言えば、イギリスのレイフレックスとか、日本だとベンFなんかがある。店には今はないけど・・・」

ガ 「いや、フォカフレックスとデュフレックスが同時に拝めたんで今望です。この2台が同時にある店は、たぶん只今現在の地球上でここだけだと思うので(笑)。お世話になりました。また来ます」

早 「おう。原稿書きもいいけど、カメラ修理の修行もちゃんとするようにね」

ガ 「へい。精進します。それでは失敬します」

というコトで、期せずして世にも珍しいペンタプリズムを使っていない歴史的一眼レフを拝んで浅草から戻ったのでした。

フォカフレックスにせよデュフレックスにせよ、フラットトップの一眼レフって格好イいですよね。ありきたりな方法をあえて採用せず、“その大勢”とは違う個性を放つ存在。ルミックスL1がボクにとって気になる一眼デジカメなのは、フランスやハンガリーの先輩カメラ達と同様に、世の中の「当たり前」に流されない勇気をもったカメラだからなのかもしれません。

←戻る

進む→

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガー・ハッピー
〜デジタルカメラルミックス L1〜ガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)shot 02
ライカ ミーツ ライカ。

「大変お待たせしました。コレ、L1の一式です」と
パナソニックマーケティング本部の会議室で手渡され
た銀色の箱。いよいよルミックスL1の実機との対面
です。お行儀が悪いと承知しながらも、その場で開梱
してみれば、当たり前ですけどL1はレンズとボディが
別々にパッケージされているんですね。パナソニック
としては初のレンズ交換式一眼デジカメ。



マウント部

グリップ部

バヨネット式マウントの確かな手ごたえを感じつつボ
ディにレンズを装着してみれば、思ったほどには重く
なく、かつしっかりしたホールド感なのでありまし
た。グリップの感触は往年のレンジファインダーカメ
ラというよりは、むしろ最新のオートフォーカス一眼
レフに近い感じ。ノスタルジックな印象の外観の中
には、ギッシリと最新テクノロジーが詰まっている証
拠です。

さて、このルミックスL1で最初に何を撮るべきか？
ご存知の通り、同梱されている交換レンズはライカのD
バリオ・エルマリットなのであります。何と言ってもラ
イカのレンズですから、生半可なモチーフで筆おろし
をしようといけナイ気がします。そこで間髪を入れ
ず、その足で銀座にあるライカのフラッグシップショッ
プへと向かうことにします。2006年の春にオープンし
た世界初のライカカメラ直営ショップには、ドイツ本
国から特別な計らいによって移送されてきた驚くべきラ
イカが展示されているからです。



ライカ銀座店

ライカ製品のフルラインナップ
を紹介するだけでなく、修理や
メンテナンスの窓口も併設。今
回ご紹介したライカは近々ドイ
ツへと戻される予定です。

東京都中央区銀座6-4-1
Tel.03(6215)7070
営業時間：11:00～19:00
定休日：月曜日

「何度か拝ませていただいている、あの貴重なライカ
を、このライカレンズで撮影させて頂きたいのです」
と、やおらルミックスL1をバックパックから取り出し、
ライカを愛してやまないプレス担当の米山さんにお
願いしたところ、「お、パナソニックの最新機種。
もう使ってるんですか。早いですね(笑)」と興味しん
しんの様子。ウェブへの掲載も快諾していただき早
速白い手袋をして撮影に入ります。

手にして1時間も経過していない最新デジカメで貴重
なライカを撮影する。このシチュエーションは緊張して
しまいますよね。そおっと白手袋経由で触れて少しだ
け位置を変えてみたライカ。今まで書物でしか見たこ
とのなかった歴史の証人の感触……。ややアタマの中
が真っ白になりかかりながらも、ルミックスL1での
ファーストショットに挑みます。光学式一眼レフファ
インダーで構図を決め、撮影結果は即座に鮮明なモニ
ターでチェック。自分のイメージどおりになるように微
妙な露出補正をして、もう1カット。あ、奥までピン
トが来ていないから絞らなくちゃダメだ。と、思い立
った瞬間には絞りリングに手が伸びてAマークを解
除。16に設定してもう1カット。これがファンクシ
ョンボタンとコマンドダイヤルの組み合わせという現在
では一般的な仕立てのインターフェイスであったなら間違
いなくパニックになりそうな状況でも、絞りやシャッ
ター速度が直接操作できるのは大いなるアドバンテ
ージなのだ実感しながらもう1カット。イキナリの撮
影は無事に終了したのでした。



はい、このライカIII型は、飛行船ヒンデンブルグ号の惨
劇の跡の現場から回収されたものだそうです。かなり
燃え燃えです。黒い貼り革(グッタペルカ)なんか完全
に溶けて蒸発してしまってます。時に1937年5月6
日、米国レイクハーストにて爆発・炎上した悲劇の飛
行船ヒンデンブルグ号。レンズの前部が溶解してしま
っているのを見ると、猛烈な温度の炎に包まれてしま
ったと推測されますね。合掌。



このライカIII型は、ボディに凹みがあります。普通に落
つことしてキズが付いた感じではないです。生々しい凹
みの理由は、銃弾を浴びてしまったから。第二次世界
大戦中に取材を行っていたジャーナリストが使用して
いたものだそうです。その記者は取材中に被弾するも弾
丸はライカに当たり、彼は一命をとりとめたそうで
す。時としてライカはフォトグラファーの命を救うとい
う貴重な証拠です。ありがたや、ライカ。

どうしてライカは燃えさかる飛行船と運命を共にした
り、戦場で銃弾に当たったりしたのか？ その理由は
世界のあらゆる所でライカが活躍していたからに違
いないのです。世界の断片を記録し歴史を刻み続けて
きたライカは、時としてライカそのものに歴史的事件
を刻みつけてしまうということですね。

ライカ ミーツ ライカ。

はたしてボクが手にしたルミックスL1に装着された
ライカDバリオ・エルマリットは、これからどんな映
像を撮像素子へと伝えてくれるのでしょうか。そんな期
待がふくらんでしまうのは、このレンズがライカの銘を
刻んでいるからに他ならないのです。



←戻る

進む→

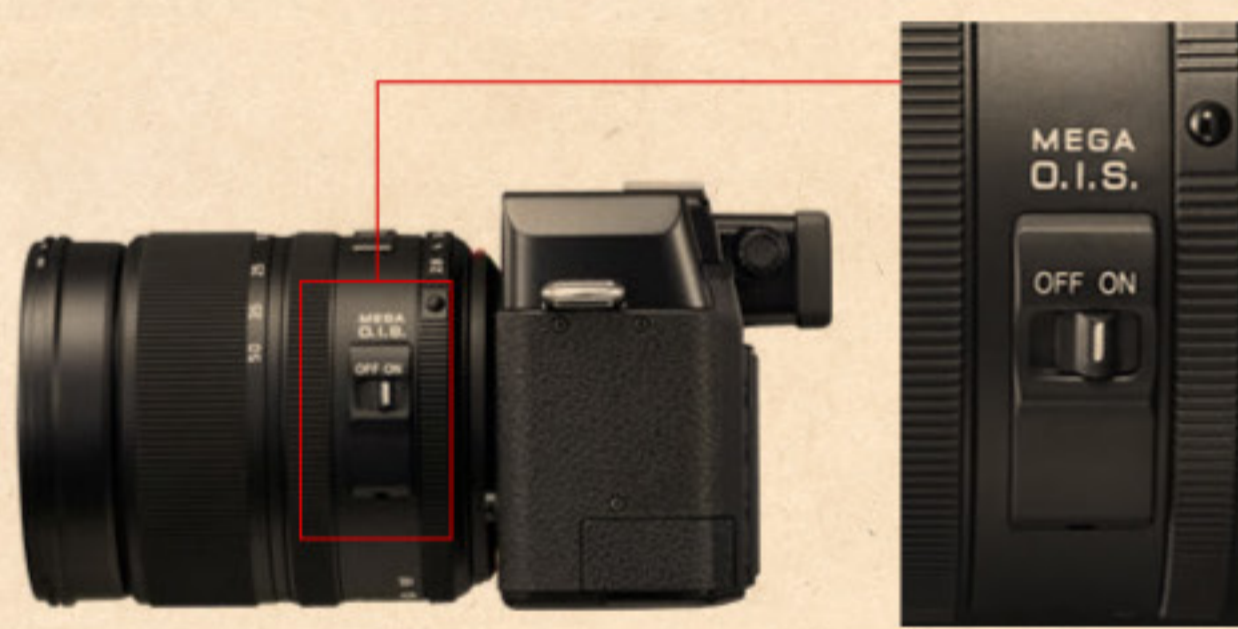
ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラ ルミックス L1〜ガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)shot 03
ありがたきもの、手ブレ補正。

「アボカドハンバーグが食べたい？」といったところでそんなメニューを覚えたのか不明ですけど、久しぶりに父親と夕食でも。と思い立って電話して何が食べたいかリクエストはないかと尋ねてみれば、思いもよらぬ反応が返ってきたのでありました。多少のとまどいを感じつつ、それなら近所のバーガーショップにでも行きましょう。と、トートバッグにサイフとルミックスL1を入れて店へと向かいます。ボクは出かけるときにカメラを1台セレクトしてカバンに突っ込むのが習慣になっているのですが、今日はL1の気分。ややキッチュな趣のあるアメリカンダイナー風の内装を施した店内で、サーブされたアボカドハンバーガーというハイカラメニューにまんざらでもない面持ちの父親をササッと数枚の写真に収めます。



この撮影条件、普通のフィルムカメラを持って行っていたならば写真を撮るのを諦めるようなシチュエーションなのであります。営業中の店内でフラッシュを発光させるのは非常に無粋な行為である。という信条のボクとしては、その場にある光だけで写真が撮りたい。でも、天井のスポット照明は父には当たっておらず、背後には交通信号機。厨房から廻ってくる光と、店内の照明には大きく色温度に差がある。露出もピントもカラーバランスも悩ましい。でもあれこれ悩んでいるとバーガーがさめて美味しくなくなるし、待たされると人間の表情だって曇ってくるものです。そこで間髪入れずホワイトバランスはオートからタングステン光へチェンジ。試しにマルチ測光モードで撮影してみれば、いい感じの写真が撮れているんですね。

感度の設定は800ですが、かなり被写体が暗いので絞りは開放近くでシャッター速度も1/25秒。この条件だとブレにも気を付けなくちゃダメなのですが、ルミックスL1に標準装備されたライカレンズには光学式の手ブレ補正機能が組み込まれているのです。



このスイッチを"ON"にしておくだけで、手ブレが防げる。ルミックスのシリーズにはお馴染みの機能が一眼デジカメのL1でも使えるんですね。たいがいの場合、失敗したなあ。と思う写真の原因は手ブレだったりするもの。咄嗟のシャッターチャンスに際しては不必要なチカラが指に伝わったりして手ブレを招きやすいですから、ボクは光学式手ブレ補正スイッチを常時"ON"にして使ってます。頻繁に使用する絞りのリングと垂直に交わるレイアウトでスライドスイッチが設置されているので、不用意にスイッチがOFFへと切り替わってしまったりしないのも好印象です。

光学式手ブレ補正レンズの動作イメージ



毎秒4,000回もの細かさで高速処理される、手ブレ補正。ジャイロセンサーが感知した人間の微細な動きと反対方向にレンズの光軸をシフトしてしまうというテクノロジーにより、気楽に失敗のない写真が撮れるのであります。普段なら「このシャッター速度だとブレるかも」と思うようなシチュエーションでも余裕のある気持ちで写真が撮れるのは気分がよいものです。



このカットのシャッター速度は2.5秒。昨今の日本における照明環境はタングステン光が蛍光灯に勝ってきているという傾向が見えてきますね。ちなみに結構な長時間露光なので三脚を使っております。こんな撮影状況でも、手ブレ補正機能は"ON"のままです。その理由は、三脚を使っている場合でもカメラのシャッターを押す人間の指が勢いあまってブレを生み出しているとも限らないから。白状しますと、ボクは三脚を使ってもブレた写真を撮ることがあるのです。常時"ON"で使用している光学式手ブレ補正。ありがたき機能ではありますが、それに甘えずに常に撮影者は手ブレに注意すべきだと思います。その気概と手ブレ補正機能が手を結べば、今までは諦めていた様な条件下でも、強気で撮影できそうですね。

shot 04 ライブビューって、何だ？

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラルミックスL1〜



ガンダーラ井上 ▶
(別ウィンドウが開きます)



プレミアム一眼ルミックスL1には、普通一眼レフには出来ないプレミアムな機能が搭載されているのですが「ライブビュー」もそのひとつ。で、どんなコトが出来るのかといえば、背面の大型液晶モニターでもフレーミングが可能なんです。この機能がスゴイ！と驚ける人は、一眼レフの仕組みを理解している方だと思います。ちょっとムズカシイ説明をはじめる前に、こちらの画像をごらんください。

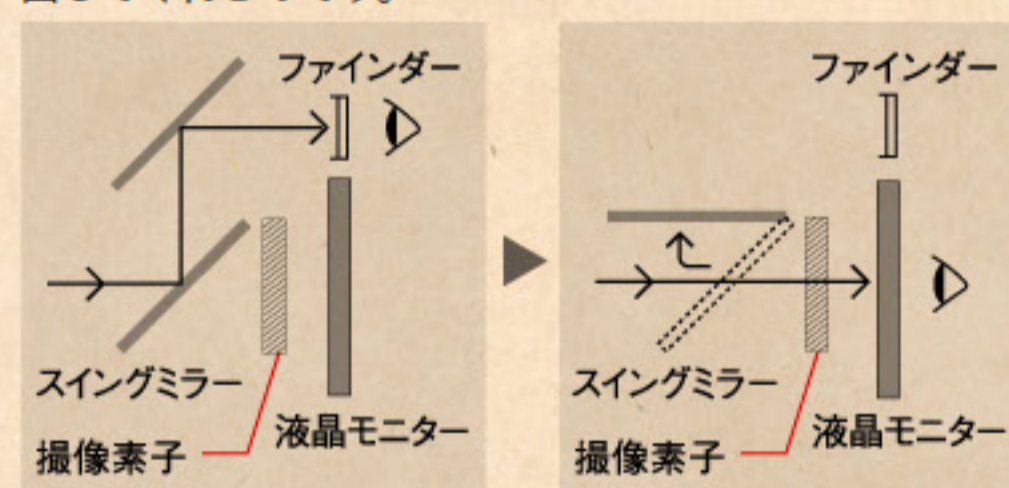


はい、こちらはロシア（旧ソ連）で使用されたと思われる切手ですね。最近ではeメールばかりだから切手という存在自体が何だか新鮮な感じがします。たとえばこのカットみたいな写真を撮ろうとする場合、光学式のファインダーだと実際に撮影される範囲はファインダーで確認できる範囲よりも微妙に広いので、イメージどおりの構図が組みづらいという問題が起きてきたりするのです。具体的には黒い余白（黒くても余白？）の部分が光学式のファインダー内では、もっと狭くてギリギリに見えています。

そこで、ライブビューのボタンを押して液晶モニターへと切り替えれば、見えている範囲の100%が撮影されるという次第。しかも、液晶モニター上には大きなマス目と小さなマス目2種類のガイドラインも表示できるので、フレーミングが正確に追い込めるのです。



いままではデジタル一眼レフの液晶モニターとは、撮影結果を確認するためのモニターでした。ルミックスL1では、ライブビュー時はレンズに入ってきた光を直接センサーがキャッチすることで、液晶モニターが「いままさに撮ろうとしている映像」をライブで映し出してくれるのです。



ファインダー使用時
液晶モニターを使ってフレーミングするという行為はコンパクトデジカメの普及により当たり前の撮影スタイルになりました。でも、一眼レフでは光学的な構造から同様の撮影スタイルを提供するのはムズカシイ。その困難な課題に対する答がライブビューなのです。光学式のファインダーでおおまかな構図を決めたら、ライブビューのボタンを押す。液晶モニター上ではマニュアルフォーカス時には任意のポイントへとカーソルを動かして画面を4倍、そして10倍に拡大してピントを確認することだって可能なのです。

MFアシスト設定時



(マウスオーバーで拡大します)

何だか愛くるしい表情ですね。おそらく原画は水彩で描かれているのだからと撮影前に得心したのはMFアシスト機能のおかげです。

MFアシスト設定時



(マウスオーバーで拡大します)

ほぼ同じモチーフの切手ですけど、日本郵便では凄く解像度のイラストレーションを細密な印刷技術で再現していることがライブビューで判明。ニホンカワソウの前脚には鋭いツメがあるみたいです。

切手という同じ目的を果たすアイテムでも、国により仕立てが全然違う。これは切手に限ったコトではなくて、カメラだって同じだったりします。その違いに対して優劣をつけるのではなく、どちらも面白いなあ。と旧ソ連製と日本製のフィルムカメラの両方を使ってみたいと思っているのですけれど、こまデジカメに関しては日本製が良いのでは。と思います。とはいえロシアやウクライナ製のデジカメがあったら、ただの物珍しさから飛びついてしまうかもしれませんけど（笑）。

カメラ

ロシア（旧ソ連）製のレンズファインダー一眼、ドルーク。トリガー巻き上げで迅速な撮影が可能。ただし、操作してみると感触は非常に荒々しい。

日本（キヤノン）製のレンズファインダー一眼、VT。トリガー巻き上げに加え非常用の巻き上げノブも装備。精緻な仕上げが、操作感はずいぶんスムーズでキレイ。



今回の切手写真から、ふたつの疑問が浮かび上がってきています。まずガンダーラってスタンプコレクターなのか？ 答は否です。父親は明治時代の郵便はがき蒐集家ではありますが・・・つづいてルミックスL1は切手サイズまでのマクロ撮影は不可能ではないのか？ この疑問に関する解答は、次回「Shot 05」で。

※読者の方から、今回登場した外国切手は旧ソ連ではなく社会主義時代のブルガリアのものでと指摘いただきました。キリル文字だからソ連かな？と、悪いことなりました不肖ガンダーラ、反省しております。ご指摘に感謝です。

(2006年9月7日追記)

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラ ルミックス L1へガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)shot 05
フォーサーズ、レンズ交換の誘惑。

ルミックスL1は、デジタル一眼レフ。すなわち交換レンズを駆使した撮影が可能なシステムカメラなのであります。採用されたマウントはフォーサーズと呼ばれるオープンフォーマット。すなわち本規格に準拠したオリンパスやシグマ製のレンズを使用することも可能なのです。ルミックスL1はライカレンズなのが値打ちなのだ！という考え方にも賛成ですが、一眼レフのユーザーにとって、レンズの選択肢が幅広いというのは歓迎すべき事象です。さらにフォーサーズマウントのレンズだけでなく過去のアナログカメラ用として製造された数々のレンズだって、マウントアダプターというアクセサリを介することで装着できてしまうのです。

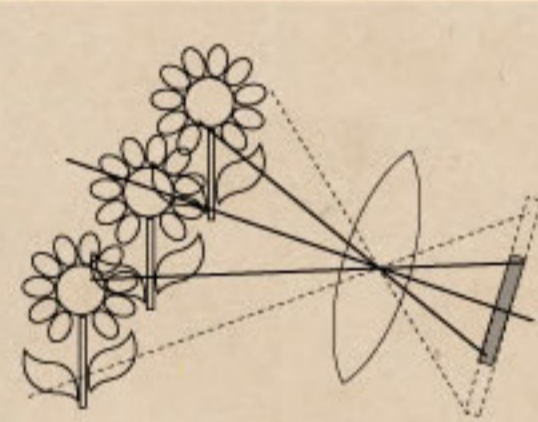
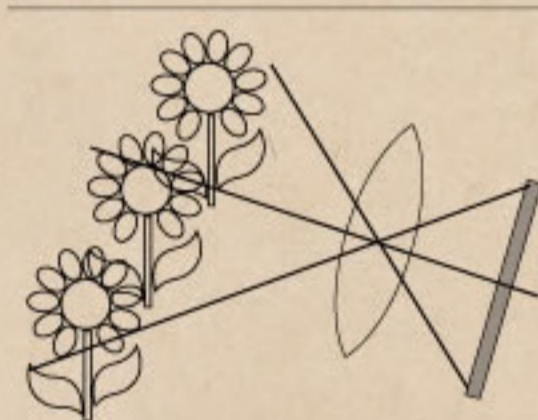
[前回の切手の写真](#)は、オリンパス製のOMフォーサーズアダプターで過去の名レンズ、OMズイコーマクロ90ミリをルミックスL1に装着して撮影してみたものでした。フィルムカメラ用のレンズをデジタルカメラと組み合わせる。世代を超えたコーディネートではありますが、ルミックスL1とオールドレンズとのスタイリングは、結構イケてる感じだと思います。



何だか格好イイですねえ。相性バツグンという感じ。ちなみにOMズイコーとルミックスL1を結合させているマウントアダプターは、オリンパスがフォーサーズ規格のデジタル一眼レフ初号機をラウンチした際にユーザーに配布したのもを使ってみました。

このアダプターは現在オリンパスからアクセサリとして商品化されていますし、サードパーティー各社から同種のアダプターが発売されておりますので、ユーザーは自己責任だと自覚しつつ、レンズ遊戯を楽しめるのです。この道、結構ディープです。だいたい、絞りの操作もピント合わせも手動になりますから撮影に面倒なプロセスが必要になります。ルミックスL1の場合には、露出計も作動しないので完全にマニュアル操作となります。それでも過去のレンズがデジタルで撮影できるというのは面白い。

35ミリフィルムを使うカメラの交換レンズをフォーサーズのデジカメに装着すると、撮像素子サイズの小さいフォーサーズでは実質の焦点距離が2倍に伸びてしまいます。これは広角レンズを使おうとすると辛いものがありますが、たとえば接写とか望遠撮影には有利なのではないでしょうか。

フォーサーズ
撮像素子
サイズ
約13.5
mm
約18mm35mm
フィルムサイズ
24
mm
36mm

はい、このカットも思い切りマクロ撮影してみたものです。またしても標準装備品であるライカレンズ以外の機材と組み合わせております。ルミックスL1へとマウントアダプターを経由して装着されたイクイップメントとレンズは以下の画像でご確認ください。



一眼デジカメとジャバラ。かなりアブナイ雰囲気ですけど、これはアナログ時代のオリンパスOMシステム純正ペローズユニット&フォーカシングステージな純正です。その先には接写専用の特殊なレンズがネジ込まれております。とんでもない組み合わせであるとは承知しておりますが、こんな特殊機材であってもルミックスL1に装着することが可能です。

こんな大袈裟なセットで撮った、先ほどの被写体とは何なのか？ 実はマッチのアタマです。アタマですから顔があるんです。「人生のとしび こけしマッチ」というジャンルな手作りマッチ。よく観察してみれば表情がそれぞれ個性的だったりして、こんなアナログな手作業って最近では貴重だったりもするので、あえてアナログ時代のレンズをつかってクローズアップにチャレンジしてみたのでした。

📷 カーソルをのせてみて！

こけしマッチ制作所 www.kokeshi-m.com
(クリックで別ウィンドウが開きます)

はい、これがこけしマッチの全貌です。このカットは標準装備品のライカレンズで撮影しております。すなわちマッチ箱程度のサイズまでのマクロ撮影であればライカDバリオ・エルマイトでサクサクと撮れるんですね。絞り優先オートって楽だなあ。と実感できたのは、オールドレンズ遊戯でフルマニュアルに没頭した後だったからかもしれません。



←戻る

進む→

ism トップ > ガンダーラ井上の帰ってきたトリガーハッピー 〜デジタルカメラ ルミックス L1〜 > ショット06 操るヨロコビ、「走る人」のないカメラ。
 ※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報は異なる場合がございます。

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラルミックスL1〜



ガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)

shot 06 操るヨロコビ、「走る人」のないカメラ。



ルミックスL1でクローズアップの世界に没入するのも楽しいですけど、もう少し大きな被写体でも撮影してみようかな。と、カメラ1台ぶらさげて散歩に出かけてみました。曇り空の隅田川。清洲橋を渡って対岸へと向かっていると、川上から一艘の輸送船が。。



遅いですがね、働く船舶って。何を運んでいるのかはシロウトの私には皆目見当が付きませんが、必要な機能だけがむき出しになっている物体には心惹かれるものがあります。それは船舶に限ったコトではなくて、日常の道具も同じだったりします。機械時代のフィルムカメラなんかにしても、プロが使う機種には使い手に対する「おせっかい」が無く、ぶっさらばうな程にシンプルな仕立てだったりするのが格好イイ。それに対してビギナー向けの普及品というのは、ユーザーが間違いをおこさないようなオマケが付いていたりするのが常なのであります。その傾向はデジタル時代になり加速してきているのではないのでしょうか。

あ、そんなウンチクを披露していたら次の船がやってきましたね。。



何とも清々しい、おそらく修学旅行の一回を乗せた観光船ですね。シャッターを切る前に橋の上から大きく手を振ってみたら、気がついて手を振りかえしてくれる生徒さんがいたりして、なごやかムードの写真が撮れました。この画像を拡大観察してみるとデッキにいる乗客でカメラを持っているのが10名。生徒さんの殆どはレンズ付きフィルムで、引率の先生らしき人物はコンパクトデジカメを使用している模様。おそらく先生が構えているコンパクトデジカメには「走る人」のピクトグラムが印刷されているに違いありません。



はい、このピクトグラムが「走る人」です。この名称は私が勝手に考案したもので、別に正式な呼び名があるのかもしれませんが、いずれにせよ「走る人」を図案化したものです。普及クラスのデジカメならばメーカーを問わず装備されているモードですね。でも周囲のカメラ好きに「走る人」を使用していることがあるかと尋ねても、誰も使っていないかったりします。この「走る人」モードとはプログラム露出の組み合わせが高速シャッターを優先したパラメーター設定になっているのですけれど、それが理解できる人ならば、自己決定を大前提としてシャッター速度優先オートで撮影するなり、プログラムをシフトすれば済むから、あまり必要を感じないみたいなのです。写真の基本的な知識を有しているユーザーに向けて作ったカメラだから余計なモードは不要である。そんな気骨を感じさせてくれるルミックスL1には、当然ですけど「走る人」モードは搭載されておりません。

あ、そんなウンチクを傾けていたら、川下から何やら不思議なシェイプの船舶が向かってきています。。



も、もしかしてこれは松本零士先生デザインの未来派水上バス「HIMIKO」じゃないですか！ 21世紀の隅田川を浅草方面に向け航行中の船体は、そのまま浮上して羽田方面へと飛行してしまいうようなフォルムなのであります。まずは落ち着いてライカDバリオ・エルマリートを広角サイドに操作。シャッター速度と絞り値を確認して1枚。ルミックスL1って、何だか操っていると気分が高揚してくる感じがイイですね。それはメーカーがユーザーを信じ、自己決定で撮影してください。という設計思想が活かされているからなのかもしれません。

ズンズンと近づいてくる「HIMIKO」。その流線型の船首部分を捉えるべく、今度は望遠側へとズーム。常時オンの手ブレ補正を信頼しつつ、シャッター速度は1/250秒にセット。色調はウォームな雰囲気を狙ってプリセットの曇天モードに固定します。



ティーンエイジャーの頃、大いなる影響を受けた松本零士先生の世界観。それが実物の船舶として動いているなんて、やっぱり長生きはするものだなあ。と、撮影後に清洲橋をてくてく歩きながら感慨に耽ります。この写真が撮れたのは、即座に清洲橋の逆サイドへとダッシュして撮影ポジションを確保したから。すなわち「走る人」モードが必要なのはカメラではなく、撮影する人間側だってコトですね。

いくつになっても、格好イイ乗り物を見たら写真が撮りたくなるのは心が若い証拠なのかもしれません。そんな永遠の少年にオススメする写真集が「コンコルド」。ドイツの気鋭、ヴォルフガング・ティルマンスの代表作とも呼べる一冊です。「あ！ コンコルドだ！ 撮れい！」と被写体へカメラを向ける高揚感が伝わってくるのが気持ちいいんです。



[Concorde]
WOLFGANG TILLMANS
ドイツ版
ISBN 3-88375-273-8

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラ ルミックス L1〜ガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)shot 07
デジタル一眼レフの天敵、それはゴミ問題。

某月某日。日本を代表するカメラメーカーのサービスステーションへと駆け込んだボクが持ち込んだのは、やや古い型番のアナログ一眼レフでした。その理由は純正品ではない旧ソ連邦製の交換レンズを装着したら外すことができなくなってしまったから。引き札の番号を見つめながらソファに腰掛け、きつと怒られるんだらうなあ。としょんぼりしているボクとは対照的に正々堂々とカメラを持ち込んでくる人々が気になります。彼らの手にしている愛機は、すべてデジタル一眼レフ。そしてサービス窓口でお願いしているのは故障の修繕ではなく、ローパスフィルターの清掃だったのです。デジタル一眼レフの宿命、それはレンズ交換時に避けようもなく侵入してしまったホコリが、撮像センサー部分に付着してしまうこと。そのメーカーさんでは保証期間内なら無償の清掃してくれるみたいですが、期間を過ぎれば清掃は有償。ユーザー自身がクリーニングする講習会も開催しており、さらに講習を受けられないユーザーにはオンラインショップで清掃用のハケやブロワー、シルボン紙とそれを巻き付けるスティック、無水エタノールを適量しみ込ませる為のハンドラップなる器具、そして教則用CD-ROMをセットにして発売しているのです。

- ① ハンドラップ
- ② ハケ
- ③ クリーニングスティック
- ④ ブロワー
- ⑤ クリーニングクロス
- ⑥ シルボン紙



この状況って、何だかオカシイですよ。一眼レフのカメラなんだからレンズを交換するのは当たり前。とはいえ空気中には無数のホコリが漂っている。だから気をつけていても撮像センサーにゴミが付着してしまう。これがアナログカメラならホコリはフィルムに付着して、次のコマに進めば自動的に送りだされるので被害は1コマだけで済むのですが、デジタルだと撮像センサーは固定されているので何百コマだってゴミが映り込んでしまうのです。デジタル一眼レフを開発するにあたり、既存のアナログカメラをベースとして設計してきた功罪は様々あると思うのですが、最も深刻なテーマ、それがゴミ問題なのではないでしょうか。その点、ルミックスL1には「ノンダストシステム」と呼ばれる機構が搭載されているのでゴミ問題を解決する為にサービスセンターへと駆け込む必要もほとんどないし、元来熟練したプロのみが使っていた道具をアマチュアが手にして清掃に失敗してしまうリスクもないのが心強いのであります。

ノンダストシステムの流れ



カメラを起動するたびに、毎秒30kHzで振動するフィルターが自動的に作動し、ゴミやホコリを除去してくれる。ハイテクですねえ。ハケとかシルボン紙というアナログな道具で掃除するのも熟練してくれば楽しい作業なのかもしれませんけれど、それはあまりにデジタルっぽくないですよ。

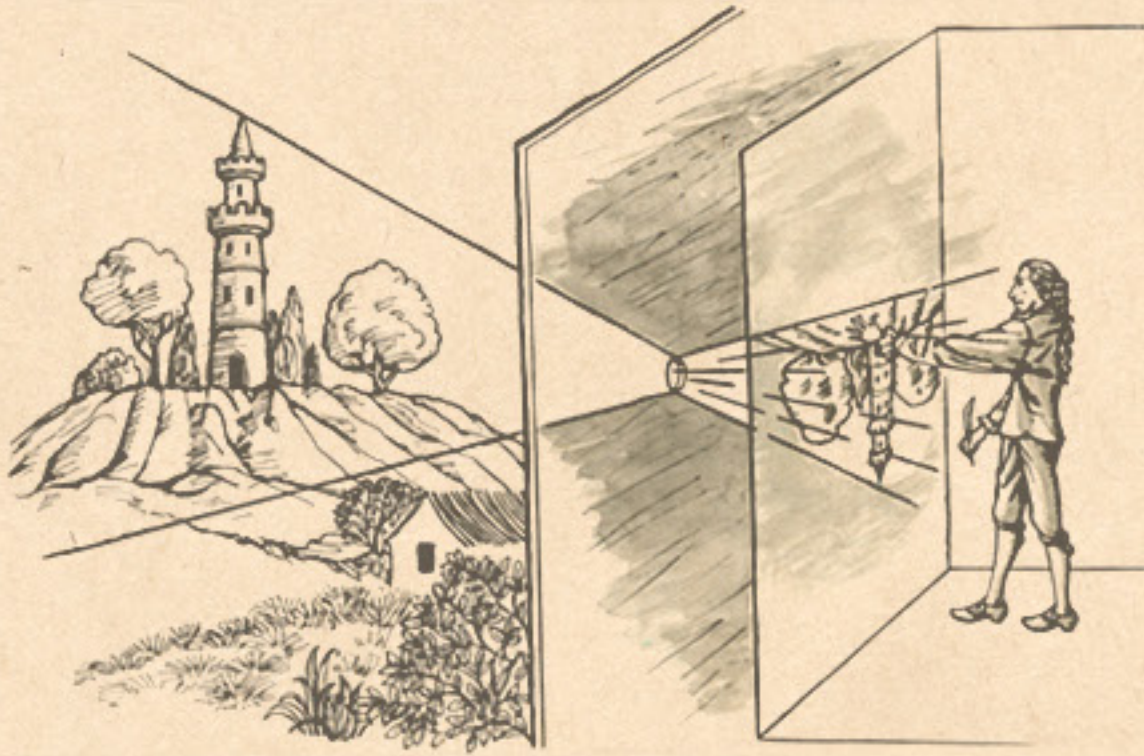
この「ノンダストシステム」、デジタル一眼レフのゴミ問題に対する有効な回答なんだと思います。既存のアナログカメラのスタイルに固執せず、デジタルならではの課題を見つける姿勢。これなら撮影後に撮像センサーへと付着したゴミをソフトウェア上でコツコツ修正するという非常に面倒くさい作業をしなくても済みそうです。事実、セットされたライカDバリオ・エルマリート以外にも、あれこれレンズを交換してみたり、おそらく目には見えないレベルでホコリが沢山漂っていたであろう接写用のジャバラを装着してみたりしても（「Shot 05」参照）、ボクの手元にあるルミックスL1において今のところゴミ問題は発生していません。

そこで、ある試みを実行してみることにしました。本体に装着すべきレンズを外し、ルミックスL1をカメラの原理が発見された当時の姿にしてみると・・・。いったいどんな姿になったのか？ 詳しくは次回「Shot 08」をご覧ください。そのヒントとなる画像をお見せして今回はオシマイにします。



ガンダーラ井上の
帰ってきたトリガーハッピー
〜デジタルカメラルミックス L1〜ガンダーラ井上▶
(別ウィンドウが開きます)shot 08
一眼デジカメでピンホール。

さて、予告どおり今回はカメラの源流をたどる試みをしてみようと思います。そもそもカメラとはカメラ・オブスキュラ（暗い部屋）という装置に語源を持っているそうです。写真機やフィルムが発明される以前から、小さな穴を開けた部屋の中に外の風景が映し出されるという現象を利用して、写実的絵画を制作する道具にカメラ・オブスキュラは使用されていたとか。



すなわち、レンズがなくとも極小の穴さえあれば写真は撮れるんです。この原理を利用してプリミティブな写真を撮るカメラが昨今流行しております。前回のヒント画像に登場した木製カメラもそのひとつ。35ミリのフィルムを使うピンホールカメラなのです。

カーンルをのせてみて!



このカメラにはレンズがなく、ピンホールが設けてあります。その穴をふさいでいる板を動かすことでフィルムに露光させる仕組み。すなわち手動のシャッターですね。文字通り針穴みたいなサイズの穴を通して光がフィルムに到達するので、スローシャッターにする必要があります。日中の屋外でも1秒とか2秒の露光時間なので、三脚を使つての撮影です。

ロケ地は横須賀くりはま花の国。100万本はあるというコスモスをめがけて出かけたのですが、前日の台風の影響で花は散っております。しょぼりしながら園内を進むと、そこに現れたのはゴジラ型の巨大なすべり台。順番待ちの親子連れの方々に迷惑にならない様に気がつかないながら、スローシャッターで1枚。

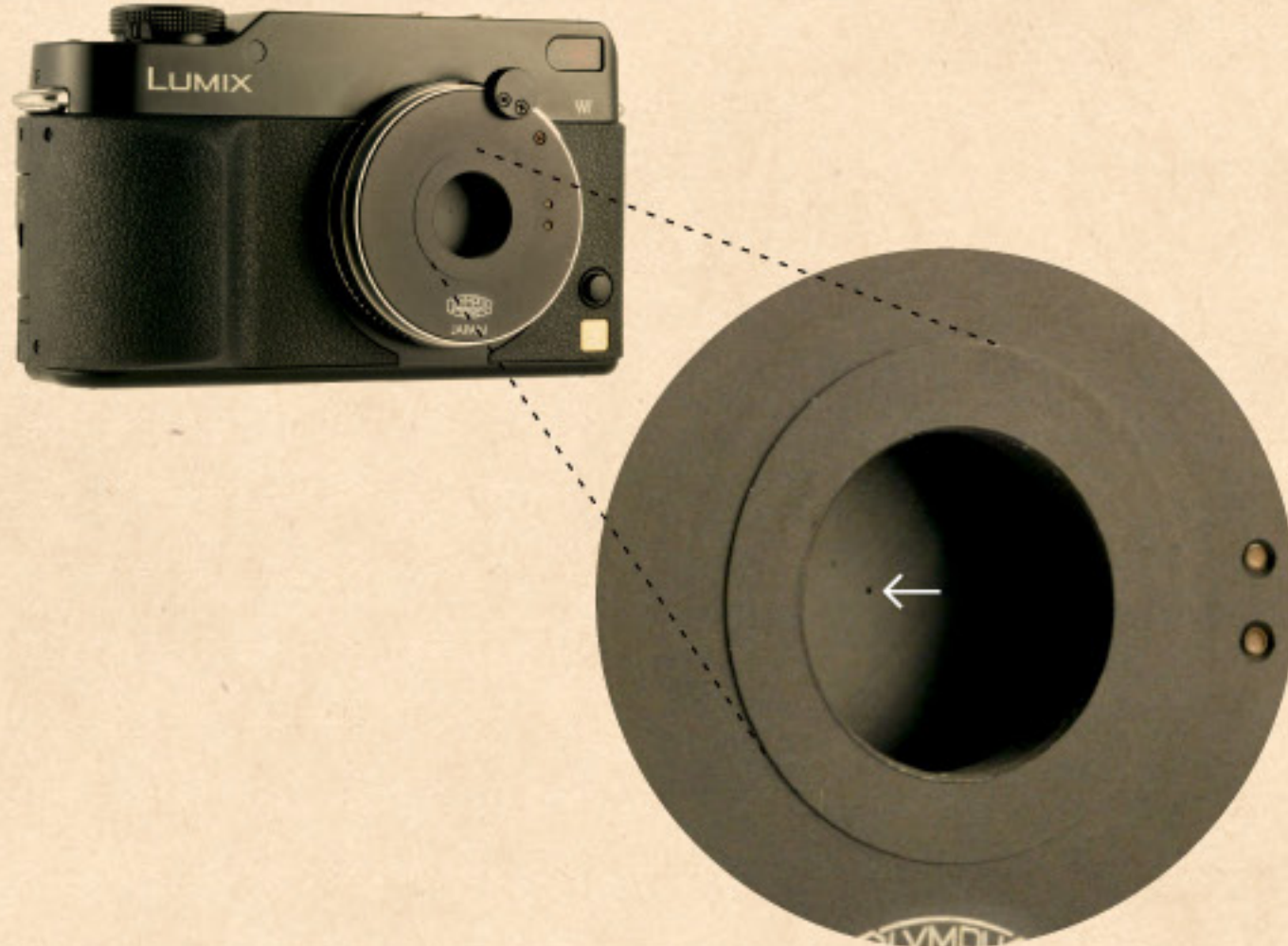


何だか夢の中にいるみたいなイメージですね。レンズを使わない写真って結構面白いものです。すなわち印象的な画像というのは必ずしも鮮鋭な画像と一緒にはないのかもしれない。

とはいえ、ピンホールカメラでの撮影って結構面倒なのも事実です。まずどこまで写っているのか見当も付かないし、どれくらいのシャッター速度にすれば適切なのか、現像してみるまで答えが出ません。そこで思いついたのが、デジタル一眼レフでピンホール撮影を試みる。実験機はもちろんルミックスL1。



用意するのは直径0.2ミリ程の穴があいた薄い金属の板。今回使用したのはカメラマン某氏から頂戴したもので、どうやらレーザー加工した高級品らしいのですが、おそらくご家庭にあるアルミ箔に縫い針で穴を開けても同じ役割をはたしてくれると思います。カメラのボディキャップにピンホールより大きな穴をあけて貼り付ければ準備完了なのですが、借り物のボディキャップを傷つけないので自前のマウントアダプターと接写レンズ用リングを組み合わせてみました。



はい、これがデジタル一眼ピンホールカメラです。見た目はハイテクだけど、レンズの代わりに針穴を使うカメラ。ところでピンホールって穴が開いているのだから、当然ですけどそこから微細なホコリやゴミがカメラ内へと侵入してしまうかもしれませんよね。でもルミックスL1には電源起動時に自動的に撮像素子をクリーニングするノングラストシステムを搭載しているから、余計な心配はせずに撮影してみました。



デジカメであってもフィルムであっても、レンズなしで写真って撮れるんですね。とはいえデジカメの有利な点は、その場で撮影結果の確認ができること。まずは適当なシャッター速度で1枚撮ってモニターで確認し、画像が暗すぎたり明るすぎたりしたらシャッター速度を変更してもう1枚。デジタルってピンホールみたいなローテク機材と組み合わせても便利に使えるのだなあ。と感心してしまったのです。

写真の原点ともいべきピンホールから、最新設計のズームレンズまで。ルミックスL1なら、撮影意図に応じて夢の中にいるみたいな画像だって目の覚めるような鮮鋭な写真だって楽しめるんです。レンズ交換が可能なデジタル一眼レフって楽しいカメラですね。

←戻る

進む→

※過去に掲載された記事になります。内容は公開時のものであり、最新の情報とは異なる場合がございます。

ガンダーラ井上の
帰ってきた
トリガーハッピー
〜デジタルカメラ ルミックス L1〜



ガンダーラ井上
(別ウィンドウが開きます)

エビローグ ライカレンズでグッドナイト。



早いもので、帰ってきたトリガーハッピーは今回にて最終回。この数ヶ月でルミックスL1を使って様々な写真を撮ってきたワケですが、前回の「Shot 08」に登場する「ゴジラのすべり台」を撮影中に、予期せぬ事態が巻き起こったのでした。

風の強かったあの日、自転車で転倒してしまった父は救急病院へと搬送され、大腿骨の付け根を骨折していると診断されました。事故のショックで心臓の動きも影響を受けてしまい、そのまま入院することになった。

足の手術をするには心臓の能力に問題があり、食事をすることも不自由な状態の父を、親戚や姉、そして不肖ガンダーラとそのパートナーが介助する日々が続いているのです。医師からは回復までに長い時間が必要だけれど、今から30分後に心停止するかもしれない。とシビアな状況を説明されているのです。

そんな時に、自分の大切な人に向かってカメラを向けてしまっていたのでしょうか？
眠っている父を横目に、お見舞いの花を撮ってみます。



夢からさめた父と、話しをしてみます。

ガ 「こんばんわ。今日の調子はどうですか」

父 「そんなに悪くない。それにしてもこの身体、本当によく使ったよ」

ガ 「ヒゲが伸びている顔を初めて見るけど、結構格好イイよね。もうすこしでヘミングウェイみたい」

父 「そうかな。そんなに太ってないよ (笑)」

ガ 「いや、体型じゃなくてヒゲがいい感じなの。この前、アボカドハンバーガーを食べた時と同じライカのレンズを付けたカメラを持ってきているんだけど、写真を撮ってもいい？」

父 「ああ、いいよ」



こんな時には、モノクロームですよね。生々しい現実なんて軽々と飛び越えて、しかも客観的に目の前にある光景を捉えること。

父の姿を数枚の写真に取めているあいだ、ルミックスL1のシャッター音が「大きいな」と感じてしまったのはボクの心の葛藤の現れなんだろうと思います。でも、もっと音が静寂だという理由でフィルムを使うライカを持ち込んでいたとしたら、夜の病室という低照度下での撮影は困難を極めたことでしょう。

撮影したら、すぐにモニターで確認するのがデジタルの流儀なのでしょうが、どんな写真が撮れているかを病室では確認しませんでした。それは満身創痍の状況でも息子に写真を撮ることを許した父に対して失礼に当たるのではないかと考えたからです。

ライカレンズでグッドナイト。
良く眠れますように。また夕食の時間に來ます。

写真を撮るまでは正直とても辛かったのですけれど、やっぱり写真に撮ってみてよかった。写真とは、真実を写すものですから…。

現状は過酷であること。でも父には、大いなる気概がまだ残っていること。このふたつの真実を受けとめるには自分の肉眼だけでは力不足だったのだと、カメラを握りしめながら改めて得心したのでした。

ありがとう、ルミックス。たいしたカメラだよ。



なんだか、モノクロってステキですね。本当は色が充滿している世界を、白と黒のトーンへと翻訳してしまう不思議。たったの1/250秒だけ存在していた現実の断片が、シャッターを押すことで美しく抽象化されてしまう。これはモノクロ写真ならではの素晴らしいななだと思います。フィルムだとかデジタルだとかは問題じゃなくて、やっぱり写真ってすごい。

写真の自転車は20年以上も前に、ボクと父がお金を出し合って購入したもので、最近ではすっかり父専用車となっていたのですが、しばらくはこの自転車を使わせてもらうことにしました。東京の空気は日増しに透明度をあげ、頬にあたる川辺の風も心地よい。このよき波動をベッドから動けぬ父へと届けるために…。もちろん、ときおり自転車から降りて気の向くままに写真を撮るのも忘れはしませんけど。

帰ってきたトリガーハッピー おわり

永らくのご愛読に感謝です。
ガンダーラ井上 拜

←戻る

いかがでしたか？あなたの評価はこちらから！ <トップ>